

F1日本グランプリまであと3週間 1996年F1チャンピオン デイモン・ヒルの来場決定

鈴鹿サーキット(三重県鈴鹿市)で、10月5日(木)～9日(月・祝)に開催される、「2017 FIA F1世界選手権シリーズ 第16戦日本グランプリレース」に、ウィリアムズF1チーム40周年記念イベントの一環として、1993年から1996年に同チームに所属し、1996年にはドライバーズチャンピオンを獲得した、デイモン・ヒル氏の来場が決定しましたのでご案内いたします。

1962年、1968年のF1チャンピオンである、グラハム・ヒル氏を父に持つデイモン・ヒル氏は、1992年にブラバムからF1デビュー。翌1993年には、今年でチーム参戦40周年を迎えるウィリアムズに移籍。1994年には日本GPでこの年6勝目を記録。1996年には、チームメイトのジャック・ビルヌーブとのタイトル争いを制し、最終戦の日本GPでドライバーズチャンピオンを獲得した、ウィリアムズを代表するドライバーのひとりです。

デイモン・ヒル氏は、F1日本グランプリ開催期間中、ヒル氏自身が非常に楽しみにしているWilliams FW11でのデモンストレーションランをはじめ、F1ステージ、前夜祭、VIPスイート、フォーミュラワンパドッククラブ™でのトークショーなどに出演いたします。なお、FW11は、ヒル氏が初めてドライブするHondaターボエンジン搭載のF1マシンです。

デイモン・ヒル(Damon Hill)

- 1960年9月17日生まれ 英国出身
- 1992年 ブラバムからF1デビュー
- 1993年 ウィリアムズに移籍し、F1第2戦ブラジルGPで初表彰台となる2位を獲得、同年第11戦ハンガリーGPで初優勝
- 1994年 日本GPでの優勝を含め、6勝を記録し、シーズン2位を獲得
- 1996年 最終戦の日本GPで優勝を飾り、年間チャンピオンを獲得
- 1999年 最終戦の日本GPを最後に現役から退く

【F1における通算成績】

- 決勝出走回数: 115戦
- 優勝回数: 22回 (ポール・ポジション: 20回)
- 表彰台獲得回数: 42回
- 獲得ポイント数: 360ポイント
- 年間チャンピオン: 1回(1996年)



1996年F1日本グランプリ表彰台



2015年モータースポーツファン感謝デーでのデイモン・ヒル氏

【デイモン・ヒル氏 出演予定イベント】

10月7日(土):

- F1トークショー (場所: GPスクエア、フォーミュラワンパドッククラブ™)
- Williams レジェンドF1デモンストレーションラン ※FW11 (場所: 国際レーシングコース)
- F1日本グランプリ前夜祭 (場所: グランドスタンド前)

10月8日(日):

- F1トークショー (場所: GPスクエア、VIPスイート)
- Williams レジェンドF1デモンストレーションラン ※FW11 (場所: 国際レーシングコース)

10月9日(月・祝):

- F1日本グランプリファンミーティング (場所: グランドスタンド前)



デモンストレーションランを行うFW11

ウィリアムズF1チーム40周年記念イベント

F1日本グランプリ特別展示「Williams F1 40th Anniversary Exhibition」

ウィリアムズF1チームの栄光の歴史を彩ってきたマシンをGPスクエアに展示します。

- 日程: 10月6日(金)～9日(月・祝)
- 場所: GPスクエア
- 展示マシン: Williams FW04、Williams FW08、Williams FW09、Williams FW11

Williams レジェンドF1デモンストレーションラン

今年はウィリアムズの黎明期、そして栄光を掴んだマシンなどによるデモンストレーションランを開催します。1986年にコンストラクターズチャンピオンを獲得したWilliams FW11は、デイモン・ヒル氏がドライブいたします。

- 日時: 10月6日(金)～8日(日) 各日1回
 - 場所: 国際レーシングコースフルコース
 - 走行マシン: Williams FW04、Williams FW08、Williams FW11 (※Williams FW11は土・日のみの走行となります)
- ※Williams FW04、Williams FW08のドライバーは決定次第、発表いたします。
※マシンおよびコースコンディションの都合により、走行は中止になる場合がございます。

<展示・デモンストレーションランマシン>

Williams FW04(1975年～1976年) [展示・デモンストレーションラン予定]

フランク・ウィリアムズは1966年に『フランク・ウィリアムズ・レーシングカーズ』を設立して1969年からF1に参戦したが、設立当初は財政基盤が弱く苦戦した。1973年によく大口のスポンサーを得てオリジナルのマシンを3台(FW01～FW03)製作するが財政難で、またもや苦戦の2シーズン送ることに。そんななか、旧式化したマシンの代わりとして新たに製作されたのがこのFW04。財政状況もあってか、当時市販されていたコスワースDFVエンジンを利用した無難な設計のマシンだった。

FW04は1975年の第4戦スペインGPで投入され、リタイヤが多かったものの、第11戦ドイツGPではジャック・ラフィットが2位の活躍を見せている。今回の展示・走行予定車両もこの当時の状態に維持されている。1976年、フランク・ウィリアムズはチームの株式の大部分をカナダの富豪ウォルター・ウルフに売却。翌1977年にフランク・ウィリアムズとパトリック・ヘッドと共同で、現在のウィリアムズチームである『ウィリアムズ・グランプリ・エンジニアリング・リミテッド』を設立した。FW04はウィリアムズ40周年の前史を伝えるものであり、苦戦のなかで唯一の輝きを見せたマシンだと言える。



Williams FW08(1982年) [展示・デモンストレーションラン予定]

1979年から投入されたFW07シリーズの後継マシンがFW08。エンジンはコスワースのDFVで、ハニカム構造を二枚のアルミ合金板ではさんだアルミ・ハニカムサンドイッチ材のモノコックシャシーにより、FW07よりも高い剛性を備えていた。また、リヤタイヤを4輪とした6輪車も計画していたためホイールベースは短めとなり、これが俊敏なマシンへと結実した。FW08は1982年の第5戦ベルギーGPから実戦投入され、俊敏さを生かした走りで上位入賞を重ねた。第14戦スイスGPではケケ・ロズベルグがこのシーズン唯一の優勝を記録。この当時のF1はターボエンジン勢が自然吸気のDFVエンジン勢をパワーで凌駕しはじめていたものの、まだターボエンジンは信頼性不足やクラッシュなどでポイントを伸ばせず、堅実に戦ったロズベルグが最多得点でチャンピオンとなった。FW08は翌1983年も活躍し、最終戦でHondaエンジンを搭載したFW09にその道を譲った。



Williams FW09(1984年) [展示のみ]

1983年、ウィリアムズチームはより強力なパワーを持つターボエンジンを必要としていた。同じ年、F2からステップアップしたスピリットチームとともにF1に参戦したHondaは、なかなか成績が振るわないでいた。ここで思惑が一致し、ウィリアムズとHondaはこの年にエンジン供給契約を締結。そしてウィリアムズチームがHondaのターボエンジンを初めて搭載するマシンとして誕生したマシンがFW09だ。FW09は1983年の最終戦南アフリカGPからデビュー。1984年は全16戦中数多くのリタイヤを記録している反面、開幕戦ブラジルGPでケケ・ロズベルグが2位となったように、完走すれば上位入賞できるパワーは持っていた。中でも第9戦ダラスGPでは、猛暑でライバルが次々とリタイヤしていくなかで、ロズベルグが堅実な走りで優勝を遂げる。これはウィリアムズ・Hondaの初優勝、Hondaにとっては1967年イタリアGP以来の優勝だった。



Williams FW11(1986年) [展示・デモンストレーションラン予定]

1986年用として設計されたのがFW11で、これは前年にウィリアムズ初のカーボンコンポジット製モノコックとしたFW10をさらに発展させたもの。なかでもリヤウイングへの気流改善のためにエンジンカウルはより小型化され、車体の空力性能は格段の向上が図られていた。更にHondaのRA166Eエンジンも燃焼効率が向上され、予選用仕様では実に1000馬力を超えていた。またこの頃走行中に各種のデータをリアルタイムで収集するテレメトリーも導入され、より高度なエンジン管理もなされるようになった。FW11は1986年にナイジェル・マンセルとネルソン・ピケがドライブし、ピケは4勝、2位3回、3位3回、マンセルは5勝、2位2回、3位2回を獲得。これでウィリアムズ・Hondaは初のコンストラクターズチャンピオンを獲得した。



株式会社 モビリティランド

東京オフィス 〒107-0062 東京都港区南青山1-15-9 第45興和ビル9F TEL(03)5770-6430 FAX(03)5770-6435 E-mail media@mobilityland.co.jp
鈴鹿サーキット 〒510-0295 三重県鈴鹿市稲生町7992 TEL(059)378-1111 FAX(059)378-4568 URL http://www.suzukacircuit.jp/